



考へるヒント

小林秀雄

考へるヒント 奥附

昭和三十九年五月二十日 初版發行

著 者 © 小林 秀雄

發行者 上林 吾郎

發行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四

印刷所 精興社 製本所 中島製本

製函所 加藤製函 定價 六〇〇圓

目

次

考へるヒント

常識	9
プラトンの「國家」	18
井伏君の「貸間あり」	29
讀者	37
漫畫	46
良心	54
歴史	61
言葉	72
役者	82
ヒットラーと惡魔	91
平家物語	104
プルターク英雄傳	113
福澤諭吉	125

四季

人形	143
縦の木	146
天の橋立	149
お月見	152
季	155
踊り	160
スランプ	163
さくら	166
批評	169
見物人	174
青年と老年	180
ネヴァ河	185
ソヴェットの旅	201

考 へ る ヒ ン ト

考
へ
る
ヒ
ン
ト

常 識

學生時代、好んでエドガー・ポーのものを讀んでゐた頃、「メールツェルの將棋差し」といふ作品を翻譯して、探偵小説専門の雜誌に賣つた事がある。十八世紀の中頃、ハンガリーのケンブレンといふ男が、將棋を差す自働人形を發明し、西ヨーロッパの大都會を興行して歩き、大成功を収めた。其後、所有者は轉々とし、今は、メールツェルといふ人の所有に歸してゐるが、未だ誰も、この連戰連勝の人形の祕密を解いたものはない。ある時、人形の公開を見物したポーが、その祕密を看破するといふ話である。ポーの推論は、簡單であつて、凡そ機械である以上、それは、數學の計算と同様に、一定の既知事項の必然的な發展には、一定の結果が避けられぬ、さういふ言はば、答は最初に與へられてゐる、孤立したシステムでなければならぬが、將棋盤の駒の動きは、一手一手、對局者の新たな判斷に基づくのだから、これを機械仕掛と考へるわけにはいかない。何處かに、人間が隠れてゐるに決つてゐる。だが、人形が勝負を始める前、メールツェルは、人形の内部も、將棋盤を乗せた机の内

部も、見物にのぞかせて、中には機械が充満し、機械のない處は、空っぽである事を證明してみせるから、半信半疑の見物も、すっかりごまかされ、立ち替り出て行く天狗どもが、負かされる毎に、大喝采といふ事になる。

ポーは、この機械の目的は、將棋を差す事にはなく、人間を隠す事にあるといふ最初の考へを飽くまでも捨てないから、内部のからくりを見せるメルツェルの手順を仔細に觀察し、その一定の手順に應じて、内部の人間が、その姿勢と位置とを適當に變へれば、外部から決して見られないでゐる事は可能だといふ結論を、遂に引出してみせる。

東大の原子核研究所が出来た時、所長の菊池博士が知人だつたので、友達と見物に出掛けた事がある。私達素人が、核破壊装置など見物しても、何の足しになるわけでもないのだが、連中の一人に、好奇心に燃えてゐる男がゐて、それが見物を熱心に主張したのである。

彼の言ふところによると、研究所には、「電子頭脳」があつて、將棋を差さうだ、今のところの性能では、専門家には負けるさうだが、俺くらゐなら、いい勝負らしい、一番やるのが楽しみだ、と言ふ。馬鹿を言へ、と言つたものの、實は、みんな、半信半疑なのである。

彼は、研究所に着いて、早速、手合せを申し出たが、うちでは將棋の研究はやつてをりませんと言はれて、大笑ひになつた。大笑ひにはなつたが、併し、私達に、所長さんと一緒に笑ふ資格があつたかどうか、と後になつて考へ込んだ事がある。ポーの昔話を一笑に附する事は、どうも出来さうな

いやうである。

常識で考へれば、將棋といふ遊戲は、人間の一種の無智を條件としてゐる筈である。名人達の讀みがどんなに深いと言つても、たかが知れてゐるからこそ、勝負はつくのであらう。では、讀みといふものが徹底した將棋の神様が二人で將棋を差したら、どういふ事になるだらうか。實は、今、この原稿を書きながら、ふとそんな事を考へてみたのである。ところが、解らなくなつた。どう考へてみてもはつきりしないのが、不愉快になつて來て、原稿が一向進まない。

丁度その時、銀座で、中谷宇吉郎に、久し振りでばつたり出食はした。この種の愚問を持ち出すには、一番適當な人物だとかねがね思つてゐたから、早速、聞いてみた。以下は、宇吉郎先生の發言に始まるその時の一問一答である。

「仕切りが縦に三つしかない一番小さな盤で、君と僕とで歩一枚づつ置いて勝負をしたらどういふ事になる」と先づ中谷先生が言ふ。

「先手必敗さ」

「仕切りをもう一つ殖やして四つにしたら……」

「先手必勝だ」

「それ、見ろ、將棋の世界は人間同士の約束の世界に過ぎない」

「だけど、約束による必然性は動かせない」

「無論だ。だから、問題は約束の數になる。普通の將棋のやうに、約束の數を無闇に殖やせば、約束の筋が讀み切れなくなるのは當り前だ」

「自業自得だな」

「自業自得だ。科學者は、さういふ世界は御免かうむる事にしてるんだ」

「御免かうむらない事にしてくれよ」

「どうしろと言ふのだ」

「將棋の神様同士で差してみたら、と言ふんだよ」

「馬鹿言ひなさんな」

「馬鹿なのは俺で、神様ぢやない。神様なら讀み切れる筈だ」

「そりや、駒のコンビネーションの數は一定だから、さういふ筈だが、いくら神様だつて、計算しようとなれば、何億年かかるかわからない」

「何億年かからうが、一向構はぬ」

「そんなら、結果は出るさ。無意味な結果が出る筈だ」

「無意味な結果とは、勝負を無意味にする結果といふ意味だな」

「無論さうだ」

「ともかく、先手必勝であるか、後手必勝であるか、それとも千日手になるか、三つのうち、どれか

になる事は判明する筈だな」

「さういふ筈だ」

「假りに、先手必勝の結果が出たら、神様は、お互ひにどうぞお先きへ、といふ事になるな」

「當り前ぢやないか。先手を決める振り駒だけが勝負になる」

「神様なら振り駒の偶然も見透しのわけだな」

「さう考へても何も悪くはない」

「すると神様を二人假定したのが、そもそも不合理だつたわけだ」

「理窟はさうだ」

「それで安心した」

「何が安心したんだ」

「結論が常識に一致したからさ」

「一體、何の話なんだ」

「それは、來月の文藝春秋に書くから、讀んでみてくれ」

「へえ、そりや讀んでみてもいいがね。僕も、近々、文藝春秋畫廊で、個展を開くから、見に来てくれ」

「そりや見に行つてもいいが、個展とはあきれたもんだ」

「失敬な事を言ふな」

「いや、素人ほど恐ろしいものはないな」

扨て、さういふ次第で、原稿の先きを續けるわけであるが、常識を守ることがは難かしいのである。文明が、やたらに専門家を要求してゐるからだ。私達常識人は、専門的知識に、おどかされ通して、氣が弱くなつてゐる。私のやうに、常識の健全性を、専門家に確めてもらふといふやうな面白くない事にもなる。機械だつてさうで、私達には、日に新たな機械の生活上の利用で手一杯で、その原理や構造に通ずる暇なぞ誰にもありはしない。科學の成果を、ただ實生活の上で利用するに足るだけの生半可な科學的知識を、私達は持つてゐるに過ぎない。これは致し方のない事だとしても、そんな生半可な知識でも、ともかく知識である事には變りはないといふ馬鹿な考へは捨てた方がよい。その點では、現代の知識人の多くが、どうにもならぬ科學輕信家になり下つてゐるやうに思はれる。少し常識を働かせて反省すれば、私達の置かれてゐる實狀ははつきりするであらう。どうしてどんな工合に利くのかは知らずにベニシリンの注射をして貰ふ私達の精神の實情は、未開地の土人の頭腦狀態と、さしたる變りはない筈だ。一方、常識人をあなどり、何かと言へば専門家風を吹かしたがる専門家達にしてみても、専門外の學問については、無智蒙昧であるより他はあるまい。この不思議な傾向は、日深刻になるであらう。」

ポーの常識は、機械には、物を判斷する能力はない、だから機械には將棋は差せぬ、と考へた。し